

学習者の心理面からみたNLP学習の授業分析（2）

—NLP講座における学習者の「つまずき」に関する調査分析—

赤松 辰彦*1, 中川 麻織*2

<概要>筆者らは、学習者がNLP講座を受講する上で遭遇するトラブルに焦点をおき、思考過程における問題点を表現させ、その「つまずき」に関する調査データを分析することにした。本稿では、授業を通して得られた結果のうち、ワークの学習者側での受講内容における問題点について述べる。

<キーワード>学習評価, 授業分析, キャリア教育, 生涯学習, NLP, D. A. Normanの7段階モデル

1. はじめに

筆者らは、NLP講座で体験するワーク上で遭遇するトラブルに焦点をおき、D. A. Normanの「ユーザーとシステムとの相互作用の7段階モデル」を参考にしたNLPにおけるワークの7段階モデルをもとに、誘導者の「つまずき」に関する調査データを分析することにした。

本稿では、ワークを通して得られた結果のうち、誘導者側での実習内容における問題点について述べる。

2. NLP講座の内容

今回、実践した米国NLP™ 協会認定NLPプラクティショナーコースの内容を以下に紹介する。

NLP講座の授業では、講師による理論や実習の解説後、受講者同士が実践し、それぞれの体験や感想を発表する。授業の最後には特定のチームに分かれてその日の体験を共有する時間を設ける。

1回目 NLPの基本概念の理解

観察についての解説と、視覚聴覚等五感を用いた観察の練習をする。

2回目 親和的関係を必要な時に築く方法(ラポール), 五感とコミュニケーションの傾向について学ぶ。

3回目 人が受信・記憶した情報と、それに対する意味付けのシステムを理解する。

4回目 人が自分の都合で編集した、言語として発信する情報に対し、欠落した情報を補う質問方法を学ぶ。

5回目 物事の捉え方という枠組みを変化させる方法を学ぶ。

6回目 催眠療法家ミルトン・エリクソンをモデルに、現代催眠入門を学ぶ。

7回目 人それぞれの時間軸を活用し、過去現在未来の捉え方を変化させる。

8回目 トラウマの解説と解消方法を学ぶ。

9回目 NLPの理論に基づいた目標設定と上級スキルの体験を行う。

10回目 9日間の総復習と実践演習を行う。

3. ワークのコミュニケーションモデル

NLP講座における各授業では、学習者を誘導者と被誘導者に分け、ペアでその日のテーマに従った体験実習を行う。

そこで、誘導者の心理的状态と被誘導者の状態をD. A. Normanの7段階モデルを応用することで、NLPにおけるワークの7段階モデルとして図1に示す。

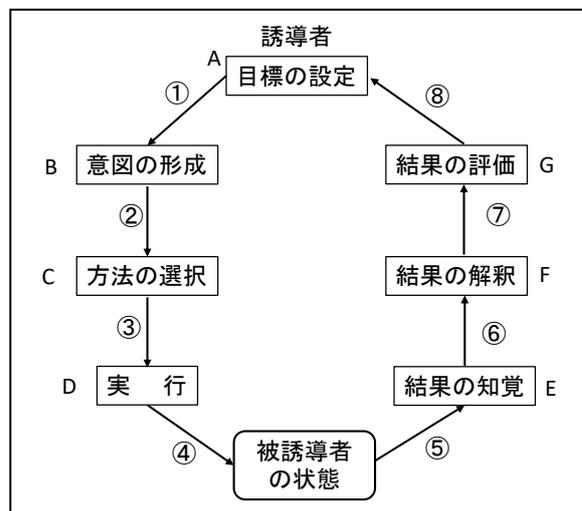


図1 NLPにおけるワークの7段階モデル

ワークではA～Gまでの各段階が存在する。
 A: 誘導目標を決定する(誘導者の目標設定)。
 B: 望ましい誘導状態を決定する(誘導意図の形成)。
 C: 実現する誘導方法を選択する(誘導方法の選択)。

*1 AKAMATSU Tatsuhiko : 株式会社シグナス e-mail= akamatsu@sign-us.jp

*2 NAKAGAWA Maori : 株式会社シグナス e-mail= nakagawa@sign-us.jp

- D: 誘導を実行する(誘導の実行).
 E: 被誘導者の状態を知る(誘導結果の知覚).
 F: 被誘導者の状態を解釈する(誘導結果の解釈).
 G: 被誘導者の状態と目標を比較する(誘導結果の評価).

また, A→B, B→C, C→D, D→被誘導者, 被誘導者→E, E→F, F→G, G→Aの間には以下に示す①～⑧のような問題点が存在する.

- ①誘導者が被誘導者を観察せずに, 自分の思い込みで目標を勝手に設定していないか.
- ②誘導者が被誘導者の望む結果を自分の思った通りの結果に誘導しようとしていないか.
- ③誘導者がワークの手順を確実に理解し, 適切な文言(質問, 誘導文など)を選択できているか.
- ④誘導者が手順や質問等に気を取られすぎて, 被誘導者の状態の観察を怠っていないか.
- ⑤誘導者が自分の思い込みで設定した被誘導者の状態と実際の状態を比較して, 誘導者が混乱していないか.
- ⑥誘導者が被誘導者の状態や発言を客観的に冷静に観察, 認識できているか(勝手な憶測で混乱していないか).
- ⑦ワークの結果が被誘導者にとって望ましい結果になっているか. また, 被誘導者が自分にとっての改善行動を起こそうという動機付けになっているか.
- ⑧誘導者が一連のワークの工程を振り返り, うまくできた点, 改善点, 疑問点を認識できているか.

4. 調査方法

授業の最後に学習者全員にその日の授業テーマごとのワークや学習内容における思考過程における問題点を質問紙法で表現させ, その「つまずき」に関する調査データを分析した.
 調査時期: 平成29年1月16日～6月 4日
 調査場所: 京都, 梅田, 天王寺
 対象者: 米国NLP™認定プラクティショナー
 コース受講者 (NLP受講初心者)

5. 調査結果

ワークや学習内容における思考過程における問題点を図1の①～⑧に分類した結果を表1に示す. なお, 表1のAはすべての回答数を, Bは有効回答数を示す. また, 第一列は1回目を1Tと表現した.

表1 問題点の種類と件数のまとめ

	A	B	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1T	12	5	0	0	1	1	0	3	0	0
2T	33	15	1	0	14	0	0	0	0	0
3T	24	7	1	0	5	1	0	0	0	0
4T	16	10	5	0	5	0	0	0	0	0
5T	20	9	1	0	8	0	0	0	0	0
6T	28	17	0	0	16	1	0	0	0	0
7T	27	20	0	0	18	2	0	0	0	0
8T	24	9	1	0	7	1	0	0	0	0
9T	23	9	3	0	5	1	0	0	0	0
10T	20	3	0	0	2	0	0	0	0	1
計	227	104	12	0	81	7	0	3	0	1

6. 考察

今回, 集計対象としたのは, 二人一組のワークで, 誘導者側視点の回答のみである. 従って, 3人以上のグループワークや被誘導者側視点の回答, ワークに関する回答以外の感想等は除外している. また, 欠席等の理由で任意の回のみ振替した受講者も含まれる. そのため, 振替受講者は毎回受講している受講生に比べ, 理解や実践力に乏しい傾向にある.

表1の結果より, 全日程で②, ⑤, ⑦の回答はなかった. ②に関しては, 今回のコースのレベルでは誘導者は手順に追われる傾向があり, 被誘導者の望む状態を誘導者の思い込み等で勝手に解釈していたとしてもうまく誘導者の思い込みに誘導できないのではないかと思われる. ⑤, ⑦も含め⑤～⑧に回答数が少ないのは, 受講者が結果に対する知覚から評価段階で問題と感じるゆとりがなかったと思われる.

また, ③の回答が79%と最も多かった理由として, 受講生は講師の解説で理解したつもりであっても, 実際にワークとして実践する際に, 手順を間違えないか, 質問の言葉が間違えていないか, 間違えると恥ずかしいなどの様々な戸惑いを感じる人が多いと考えられる.

今後は全日程を休まず受けた受講者のみを対象としたデータ分析をすることにより, 問題点分析の精度を上げたい. さらに, 上級コース受講者との比較を行うことで, 授業改善につなげていきたい.

参考文献

1. 古川康一, 溝口文雄共編, インタフェースの科学, 共立出版, 1987, pp. 23-48